

二木松の藤八は分限者だから遠慮なくやっても
らおうじゃないかという意見と、カワラ木の工場
主に出させたのでは八郎の立ち場がおかしくなる
かも知れないから藤八に金を出してもらおうとい
う意見と、藤八に出させたのでは藤八の発言力が
強くなりすぎるので、できることなら自分たちで
出し合ってつくりたいという意見と、いろいろに
分かれた末、二人に折半してもらえば妥当なので
はないかということに落ちついた。

藤八は、そんないい加減なことではできないと、
シモノカミの人間もシモノナガレの人間も、自分
の家から最も便利なところを望んだ。それぞれに
住んでいるところが離れているのだから、これは
まとまるはずがない。揉みに揉んだあげく、藤八の
好きなどころへ架けてもらおうじゃないかという
ことになる。その藤八にしてもここという決定的
な場所があるはずがない。

庄平はいった。
「それは、私も、私の家の前に橋がついた方

むきになって憤ってしまった。藤八は長老会に出
てきてもどちらかといえば発言の多い方ではなか
った。それがこんどだけは強硬な態度をくずさな
かった。

カワラ木の工場主が折れて出た。八郎が頭を
痛めているので好意的に出費しようと申し出たま
で、花ノ根の藤八を押しつけてまで費用を出し
て花ノ根に顔売る必要はどこにもなかったのだ
ある。

藤八の出費によって橋をつくることに決定はし
たが、こんどはそれをシモノのどのあたりに架ける

が便利であります。しかし、みんながみんな自分の
家のことだけを考えて橋を欲しがれば、谷川にみ
んなフタをしなくてはならなくなるでしょう。こ
んなことはできるものではないのであります。こ
こはひとつ、村全体のことも考え、花ノ根の
大局的な見地から思料しなければならぬであ
りましょう」
考えに考えたうえ、庄平の案で谷川が大川に
流れ込む川口に架けるのがよからうということに
なった。

大川の上手からきたものはシモノナガレへ行こ
うと思うときに、大川のシモノの橋まで大回りをす

るか谷川に沿って木戸ゆいの店まで遡り、谷川の橋を渡ってシモノナガレへ下がってくるほかない。これも大回りだった。庄平にこういわれてみると、なるほどその通りには違いない。

しかし、橋をつくるキツカケになったのはシモノカミとシモノナガレの住人が往復するのに谷を徒歩で渉るのは不便だからということだった。

谷川と大川の合流点というのはいちばんの下手で、どの家よりも遠い。不合理きわまる場所と思われるのだが、こう決定したのである。

花ノ根屈指の分限者、二本松の藤八の蓄財をだいぶ減らしてやったわいというひそかな住人たちの喜びの中に、梅雨について橋は谷川の川口に架けられた。

大川のカミの橋、大川のシモの橋、谷川のカミの橋、谷川のシモの橋と、橋の名称がまたややつとて公式的には籐八橋と呼ばれることになったが、かげでは茶づけ橋と呼ばれることはいうまでもない。

この架橋個所決定を聞かせられたとき、二本松の藤八はちよつと情けない顔をしたものだ。なぜなら、川口のあたりは川幅が広がったからだ。

三野庄平の家のあるあたりと比べても一・五倍はある。三野庄平の家のあたりにかけるよりは費用もそれだけ多くかかるということである。

三野庄平は、橋が川口にかかっても自分の家の前の瀬を渉る女はいるだろうと思う。そういえば、庄平がノゾキ趣味を満足させるのにいちばんいい時候がもうそこにきていた。

その夏、ひよんなことから三野庄平のノゾキ趣味がばれた。

シモノカミへ髪結いに出かけていた中村ソノの姉娘が帰りに茶づけ橋へまわるのが面倒なばかりに庄平の家の前の浅瀬を涉った。中ほどまで渡ってふと顔を上げると、ちよつど便所の窓ごしに庄平の顔があった。

娘は思わず着物の裾を持っていた手を離れたため、思うざま裾を濡らす結果になった。そのことを母親には告げなかったが、八郎にはしゃべっ

た。そのことで八郎の同情を受けたかと思つてのことだったが、八郎は娘に同情する以上に三野正平の破廉恥へ怒りを向けた。

このとき、庄平のノゾキが暴露されたのは不幸だった。庄平は、ほんとうにこのときはノゾいてはいなかったのである。のぞいていれば、思いきり目を楽しませたうえに、相手に気付かれなくできたはずだからである。

八郎は知らぬ顔して、庄平の家を訪れ、くだんの雪隠へはいつてみた。見える。

いましたという庄平ではない。いいがかりをつけるといつて逆にまくしたてられるのが落ちである。どうせ庄平の家には屋内にりっぱな便所があるのだからと、若者たちは夜しのび寄り、悪名高き雪隠を綱で引き倒すことにしてしまった。「ちよつと乱暴すぎはしないでありませんか。あんなチツポケな雪隠は庄平のことです。からすぐに再建するでありますし、ものを壊すなどという行動には、私は何やら抵抗を感じてなりません」

庄平の家に古くからいる老人の話では、庄平の便所ごもりは長かった。痔が悪いからだというのが庄平の理由づけであったが、便所が長い以外に庄平からの痔の痛みを訴えていることは聞いたことがないという。

八郎はそのことを青年たちに話した。娘たちは恥かしがってうつむいてしまい、何もいわなかったが、若者たちは三野庄平をこらしめるためにはどうすればいいかを考えた。

正面きつて抗議にいつても、たしかに悪うござと八郎はいったが、だからといつて他に効果的な方法はなかった。「また建てたら、またぶっこわしてやるだけのことです」深夜のことではあり、便所を壊す音はびっくりするほど大きかった。庄平のかわいがっているブチ犬は吠え、鶏小屋もけたたましかった。目ざめた庄平が猟銃を手にとび出していくと、無残な雪隠のむくろを残して、若者たちの姿はどこにもなかった。庄平は腹立ちまぎれに猟銃を二発

も発射したものだ。この銃声で、シモノナガレやシモノカミの一部が目を覚ましたという余計な付録までついた。

夜が明けてみると、戸袋の板にノゾキの罪と書いた紙切れがはつてあった。

このような小シヤクな悪事を働くのは、生意気ざかりの若い衆どもに違いない。つら憎い紙片なぞを残していった裏に、庄平は頭のいい八郎が糸をあやつっているのを感じた。若い衆を相手に文句をいったところで、私たちがやりました、悪

うに広がった。

犯人の中に自分のむすこはいっているのであるろうと考えた親ですら、まず事のおかしさに腹を抱えてしまった。尊大きわまりない庄平が魂消えてテツポウを撃った姿を想像すると、庄平に同情する者でも笑い出してしまうのだ。まして日頃から庄平にあまり好意を抱いていない者などは、こよない痛快感を味わったものだ。

小原恵吉村会議員はさっそく見舞いに三野庄平邸を訪れた。例の雪隠は、まるで死んだ馬の四つ

いことをして済みませんでしたと白状するものではあるまい。

ここは一つ、よくよく考えて報復してやらなければなりません、と庄平は考えた。報復だけではない、自分たち長老のいうことも聞かず、親の手にも負えなくなりかけている若い衆どもをここで挫いておかなければ、花ノ根の将来はどういうことになってしまいか知れたものではない。

庄平の家の便所が何者とも知れぬ怪漢にぶつ倒されたという事件は、またたく間に花ノ根じゅ

足のように柱を天に向け、ツボの中のちぎられた新聞がみは夏の強い陽光の下で不必要なほど白々と光って見えた。

庄平は寝不足の目をしよぼつかせながら、前夜の驚きを語った。

話を聞いているうちに、恵吉の脳裡をツボの中の有りさまがかすめた。不覚にも恵吉は庄平の見つめる前で笑ってしまったのだ。恵吉にとって

庄平は親分であり、畏怖すべき存在であった。それだけにこんどの事件は恵吉の腹の虫を喜ばせ

た。恵吉は庄平を見舞う前に、人の知らぬ場所
さんざん笑ってきたのである。だが、こうして
庄平を見ていると、またたまらなくなってしまっ
たのだ。

見るみる庄平は額に青筋を浮かせて、何やら
怒鳴りたてた。恵吉は下駄をはくのもそこそこに
庄平の家をとび出したが、これで村会議員の名誉
職も終わりだという思いがちらつきながら、まだ
笑いやめることができなかった。

(以上9月10放送分)